凶器注目効果に関する先行知識が視覚的注意に及ぼす影響

○白川 徹¹・巖島行雄²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：凶器注目効果，視覚的注意，凶器注目効果に関する先行知識

Does the presence of a weapon capture our attention automatically?

Toru SHIRAKAWA¹ and Yukio ITSUKUSHIMA²

(¹ Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon Univ., ² College of Humanities and Sciences, Nihon Univ.)

Key Words: weapon focus effect, visual attention, weapon focus instruction

目 的

目撃証言の心理学において，殺人や強盗等の犯罪現場に遭遇した際に，目撃者の視覚的注意が犯人の所持している凶器に引き付けられ，その結果，凶器に関する記憶が促進される一方で犯人の顔や衣服等の外見的特徴に関する記憶が抑制される現象は凶器注目効果と呼ばれている (Cutler, Penrod, & Martens, 1987; Hope & Wright, 2007; Kramer, Bukenhout, & Eugenio, 1990; Maass & Köhnken, 1989; Saunders, 2009)。

Pickel, Ross, & Truelove (2006) は，実験参加者に対して刺激提示前に凶器注目効果についての情報を与えることで，ターゲットに関する記憶の抑制を回避することができるという結果を得ており，凶器の存在は，目撃者の視覚的注意を自動的に引きつけるわけではないことを示唆している。しかし，Pickel et al. (2006) は，記憶成績のみを従属変数としており，実験参加者がどこを注視していたかを測定できていない。

Hoffman & Subramaniam (1995) は，眼球運動を用いて視覚的注意の検討を行っており，眼球運動と視覚的注意の間には密接な関係があると考察している。したがって，眼球運動を測定することによって，実験参加者が視覚的注意を向けている箇所を特定することが可能であると考えられる。

よって，本研究では，Pickel et al. (2006) と同様の方法で実験を行い，従属変数として記憶成績だけではなく眼球運動を用いることで，実験参加者が凶器またはターゲットへ視覚的注意を向けているかどうかを検討することを目的とした。Loftus & Mackworth (1978) は，新奇性の高い物は新奇性の低い物に比べて，停留回数が多く，停留時間が長いという結果を得ている。Yarbus (1967) は，刺激となる絵画を見る前に実験参加者が受ける教示によって，教示に関連した部分に注視分布が集まるという結果を得ている。これらの研究から，凶器注目効果についての情報を事前に提示されることで，凶器ではなくターゲットを注視することができると考えられる。

方 法

実験参加者 18歳から24歳（平均年齢19.8歳， $SD = 1.91$ ）の大学生52名（男性19名，女性33名）であった。

実験計画 凶器注目効果に関する先行知識（有（WFIP），無（WFIA））×凶器（有（WP），無（WA））の2要因実験参加者間計画を用いた。

刺激 凶器の有無によって内容の異なる，1組19枚から成る2組のスライドを用いた。1枚目から16枚目までは2組とも同一のスライドであった。17枚目から19枚目において，WP条件のスライドでは，飲食店のレジで男性が包丁を用いて強盗を行う場面が提示され，WA条件のスライドでは，同じ男性が千円札を用いて会計を行う場面が提示された。

装置 眼球運動の測定には，EyeLink2000（SR Research）を用いた。

手続き 実験参加者は，WFIP条件では，凶器注目効果について説明された文章を，WFIA条件ではバーナム効果につい

て説明された文章を提示され，理解して覚えるように教示を受けた。その後，スライドが提示された。各スライドの提示時間は1.5秒で，17枚目のスライドで眼球運動の測定が行われた。最後に，ターゲットに関する質問項目と，所持物に関する質問項目から構成された質問紙に回答した。

結 果

従属変数に対し，凶器注目効果に関する先行知識×凶器の2要因分散分析を行い，交互作用が有意であった場合には，単純主効果検定を行った。ターゲットに関する結果をFigure 1に，所持物に関する結果をFigure 2に示す。

Figure 1. Results of (a) memory performance and (b) fixations durations for target. ■: WFIP, □: WFIA *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .10$

Figure 2. Results of (a) memory performance and (b) fixations durations for object. ■: WFIP, □: WFIA ** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

ターゲットに関する結果では，凶器注目効果の生起が確認された上で，WP条件において，WFIP条件がWFIA条件に比べ，記憶成績が高く，停留時間が長かったことから，凶器注目効果に関する先行知識を獲得することで，ターゲットへ視覚的注意を向けることができたと考えられる。一方で，所持物に関する結果では，凶器の主効果のみが有意であり，凶器注目効果に関する先行知識の有無に関わらず，凶器に視覚的注意を向けたと考えられる。これらの結果は，ターゲットへは制御的な注意処理が行われ，凶器へは自動的な注意処理が行われることを示唆している。